

心に寄り添う

平成7年1月17日、阪神・淡路大震災が発生した。
神戸の町に全国から、世界から、多くの救助や支援部隊が駆けつけてくれた。
うれしかった。この時の感謝の気持ちを、絶対に忘れてはいけないと、心に誓った。

平成23年3月11日、東北の沿岸部を津波が襲い、各地で大きな被害が発生した。私は、兵庫県警察の女性警察官で編成された『のじぎく隊』の一員として、震災発生から1か月後の4月、宮城県に出動した。

私たち『のじぎく隊』に課せられた任務は、避難所における生活相談を通じた「心の支援」である。

「心の支援」は成果が目で確認できる活動ではない。
不安であった。

さらに、現地における被害状況は、想像していたより甚大で、自分自身の小ささを思い知らされた。肉体的、精神的に追い込まれた私は、ついに自分に何ができるのか、何ができているのかさえ、分からなくなってしまった。



被災した子どもたちと交流するのじぎく隊

そんな時であった。石巻市内の避難所で、50歳半ばの男性と出会った。
男性は、私と目が合うと、私の方に歩み寄ってきて、こう言った。
「おまわりさん、私、運転免許証をなくしたんです。」
私は、「やっと自分にできることがあった。」と思い、迷うことなく再交付の用紙をカバンから取り出し、男性の目の前に差し出した。

今思えば、私の考えは浅はかであった。男性は、私の差し出した手を払いのけるようにして、用紙を拒否した。そして、
「再交付の仕方は掲示板に貼ってあるから知っている。」
とぶっきらぼうに言い放ち、近くにあったイスに座って身体を前に倒し、顔を伏せてしまった。

なぜ怒っているのかが分からなかった。戸惑った。
しばらくすると、男性の体が震え始め、床にポタポタとしずくが落ち始めた。
私はしゃがんで男性の顔をのぞき込んだ。
すると男性は、奥歯をかみしめ、顔をくしゃくしゃにしながら泣いていた。
なぜ泣いているのかが、分からなかった。なぜ悲しいのかが、分からなかった。
「大丈夫ですか。」

頭に浮かんだ精一杯の言葉をかけた。それ以上のなぐさめの言葉は、思い浮かばなかった。

しかし、男性は泣き続けた。だから、私は謝るしかなかった。
正座して、床におでこが着くくらい頭を下げ、謝った。
「すみません。すみません。本当にすみません。お役に立てなくてすみません。
お力になれなくて、本当にすみません。本当に、本当にすみません。」
男性の涙の横に、私の涙が落ちた。

そんな私の姿に気付いたのか、男性が顔を上げ、私に語り始めた。
男性は激しく流れる津波から逃げてきたのだ。途中、ポケットの中の財布と携帯電話を失った。
家も車も失った。

大切な8人の家族を失った。残ったのは、自分の命だけだった。
生きる力が全くわいてこなかった。これからどう生きていったらいいのか、分からなかった。
ただただ、途方に暮れる日々だった。

そんな男性に、8人の家族を埋葬する知らせの手紙が来た。埋葬場所は避難所から遠く離れた場所だった。

「お巡りさん。私は全ての財産を失いました。一銭のお金もありません。電車もバスも動いていません。そんな私に、遠く離れた所まで来いと言われても無理です。他にもいろんな手続きの仕方が掲示板に貼っていますが、できないことばかりです。

世の中は、お知らせを送ったり、掲示板の手続きの仕方を貼ったりすれば、復興が一步進んだように言います。でも、私は家族との別れすらできないんですよ。

なにが復興ですかね。悔しくて悔しくて、3日間眠れませんでした。」
男性はそう言って、自分の袖口で頬の涙を拭いた。そして、今度は私の顔をしっかりと見ながら話を続けた。

「今日の朝、『のじぎく隊』が避難所に入ってきたので、様子を見ていました。避難所にいる人たちと話をしているようでした。

だから、私のこの思いを『のじぎく隊』に聞いてもらおうと思いました。そしたら、あなたと目が合ったんです。私はあなたに話を聞いてもらおうと思い歩み寄りました。もちろん、あなたに話を聞いてもらっても、何も解決しないことくらい分かっています。でも、私の気持ちを整理するために、一步踏み出すために、話を聞いてほしかったんです。

なのに最初、失礼な態度を取ってしまい、すみませんでした。今、少しホッとしています。眠れそうな気がします。本当にありがとうございます。」

男性はそう言って、イスから立ち上がり、自分の避難場所へと戻っていった。

なぜ、気が付かなかったんだろう。私たち『のじぎく隊』を待っている人がいることを。なぜ、気が付かなかったんだろう。『のじぎく隊』に話を聞いてほしいと思っている人がいることを。

男性が去ったあと、反省の涙が止まらなかった。

避難所には、傷ついた人たちがたくさんいた。誰もが復興に向け、一步を踏み出さなければならぬと思っていた。でも、ひとりぼっちではその一步が踏み出せない。

だからこそ「心の支援」が必要なのだ。

「心の支援」とは？それは被災者を理解し受け止め、寄り添うことではないだろうか。

東北の復興はまだまだ始まったばかりだ。

東北が本当の復興を果たす日まで…私は心に寄り添おうと誓った。



にしもとさちよ
兵庫県警・西本幸代

(神戸市の防災教育副読本『幸せ 運ぼう』中学校版から)

※のじぎく隊……阪神大震災を機に結成された、兵庫県の花「ノジギク」から名前を取った兵庫県警の女性中心の部隊。東日本大震災の避難所で被災者のケアや防犯指導、様々な相談を行った。